二〇一七年第三回宝井其角俳句大会

「二十句詠」入賞作品

★大賞「俳俳俳俳」

矢崎硯水（やざきけんすい）

長野県諏訪市

八十一歳

綿津見のさより身を以て感嘆符

吾に尾のあらば凭れて春逝かす

躁過ぎて鬱来にけらし世は朧

千の眼に視られ縮緬雑魚を干す

鈴懸の花よトカレフ購ひそびれ

ああ運否天賦卯の花腐しかな

あなたへの繭の中から糸でんわ

ラムネ呑んで微分積分解く気分

夏季講習ダリの柔らか時計見よ

井の中の蛙見つけぬ井戸浚へ

作麼生の梨の有りの実ありやなし

雲隠れしてじらすかよ星の恋

自然薯の尻尾を任じよっこらさ

残り蚊を矯めて嬶への大びんた

釣瓶落しの身は耐へがたし二日灸

勿体なや辻にふぐりを落しける

ゲゲゲバス角を曲がれば葱の剣

裏返し着る一刻がちゃんちゃんこ

俳諧師しをり利かせて米こぼせ

独楽澄めり地球の芯をさぐり当て

★準賞「故郷」

日野百草（ひのひゃくそう）

東京都日野市

四十四歳

国境緩き日本の冬田道

雪女母の顔してついてくる

誰よりも遠くへ行かぬ毛糸玉

白鳥に真つ白な死のありにけり

人間に少し疲れて山眠る

雪ですと女先生のたまひぬ

寒灯や神学校の受難曲

人生を半分休む布団敷く

行年の星従へる夜汽車かな

春嵐大事なことは言へぬまま

消しゴムの角あるままに卒業す

下萌やこれより反抗期に入る

初桜誰の日記も次は白

麦秋や負けて悔しい子が走る

水鉄砲打たれる前に抱きしめる

草むしり根の白色を惜しみけり

岩百合やまた若者が島をでる

旅先の水ありがたし瓜の花

ひとつ終へまた旅に出る半夏生

帰省する故郷違えど同じ道

★三席「虹の輪」

草子洗（そうしあらい）

大分県大分市　四十一歳

あをぞらのスケート靴の雫かな

寒鰤や雲に湧き立つ人のこゑ

コルク抜く音よハッピーニューイヤー

天の道太くありけり初山河

大鷹のひろがりを乗せ由布の空

島へゆく橋をわたれば春動く

東より大地ぬくもり孕鹿

風光るコーヒー豆をひく音色

しらうををすくひひとしき光あり

龍天に登る万物機嫌良し

一反の春一番を呼ぶ帆かな

ちちははの幼く見ゆる蜷の道

少女子の煮つまるまでの騒がしき

鍵盤をつかむよに弾き夏来たる

ひとひらの夕日をすすり冷し酒

いつか私虹の輪くぐり死にゆかむ

癌といふ熱を下げんと今日の月

もてなせば栗めし金にこぼれけり

山の音水にひびくや新豆腐

打診するゆびの優しさ冬に入る

★三席「冬日」

山原みさ子（やまはらみさこ）

千葉県印西市

六十八歳

秋刀魚焼くからと子守を任さるる

林檎むく為のテーブルひと拭きす

売店の奥が入口蜜柑狩

蜜柑狩いつかひとりになつてをり

二個三個深夜の卓の蜜柑かな

整理券持たされてゐる年の暮

懸命に登る石段初詣

元旦のつぶつぶつぶす離乳食

生花に少し水足す三日かな

窓際に近き鳥声雪の朝

雪遊びでつかい声で誘はるる

煌煌と仁王の腹の冬日かな

木の瘤の魔女めく春の嵐かな

早春の海辺の町の理容燈

今もある本家の井戸や梅開く

二人連れ犬連れ子連れ梅真白

利根川を越えたる杉の花粉かな

石段をひひなに譲る海の神

鳥帰るモデルハウスの並ぶ町

チューリップ父に似る子と母似の子

★三席「ふるさとの四季」

北村純一（きたむらじゅんいち）

神奈川県厚木市

七十二歳

麦踏んで己がリズムに乗りにけり

初蝶の触るるものみな柔らかし

花吹雪耳の奥まで愉快なり

城壁に忍者のやうな青蜥蜴

麦笛の音色に風も走り出す

川風をたつぷり入れて夏料理

芒原立ち泳ぎして抜けにけり

潮の香の蟹が値札を銜へけり

裸子の鼓動丸ごと抱きにけり

山の端を飲み込んでゆく雲の峰

肩ぐるま日焼けの顔を重ねをり

青簾猫が覗ひて通りけり

身のどこか鍵かけ忘れ昼寝する

鬼やんま尻尾に見せる息遣ひ

鬼灯を上手に鳴らし母になる

蝌蚪あまた八分音符で踊り出す

鈴割りの玉が秋天めつた打ち

徳利の林つくりて月と飲む

悪戯な犬の目にある大花野

居酒屋を出れば氷雨はガラス玉